

『クァルテット アルモニコの活動』

アルモニコのプロフィール

1995年 東京芸術大学の同級生（菅谷早葉、生田絵美、阪本奈津子、窪田亮）によって結成。

2000年同大学院（弦楽四重奏専攻）修了。

2000年2月第4回シューベルト国際コンクールにおいて優勝、併せて20世紀音楽最優秀演奏賞受賞、続けて同4月、第8回ロンドン国際弦楽四重奏コンクールにおいて第2位入賞。

現在ウィーン国立音楽大学大学院に籍を置き、オーストリア、イギリス、フランス、ドイツ、スロヴェニア、日本などで活発な演奏活動を広げている。

日本では、現在トッパンホール<エスポワールシリーズ>に出演中。

<http://www.ne.jp/asahi/quartetto/armonico/>

私達が同級生の気のあった仲間、弦楽四重奏団クァルテット アルモニコを結成したのは1995年の1月、大学2年の終わりのことでした。

芸大では、入学して最初の1年は、必修科目として弦楽四重奏のグループ授業があり、2年次からは選択科目として、個々に組めるようなシステムになっていました。

結成した当初、私達4人はそれぞれアンサンブルをすることがとても楽しかったのも、ただ純粹に弦楽四重奏を弾きたい、と思って仲の良かった友達同志で組んだわけですが、その当時は将来がまだ何も見えていないほど若かったので、これでやっていこう、などという心構えも全くありませんでした。

しかし結成してから現在までに、多くの素晴らしい先生方との出会いがあり、弦楽四重奏の世界の素晴らしさを知るにつれ、どんどんとその魅力にとりつかれて今に至っています。結成して1ヶ月足らずの時に、弦楽四重奏の巨匠、アマデウス弦楽四重奏団の方々が来日されており、まだ弦楽四重奏を始めたばかりで、右も左もわからなかった私達もレッスンを受ける機会を頂きました。その時に第1ヴァイオリンのブレニンさんが、弦楽四重奏への熱い想いを語って下さいました。

「私がなぜ弦楽四重奏をやるのか。それは、ベートーヴェンの後期の弦楽四重奏曲を弾くためだ。」

当時の若かった私達には、ベートーヴェンの後期の作品は長大で難解でしたので、この言葉の意味をよくは理解できていませんでした。しかし今、結成して8年が経ち、後期の作品を2つ勉強してみて、その中にある深遠さ（人間、人生の葛藤、宗教的宇宙観などを併せ持った世界）を知るにつれ、その言葉の意味がだんだんわかってきたような気がします。

演奏家は何百年も前に生きた作曲家と、現在を生きる聴衆を結び付ける媒体

です。作曲家の残した譜面から、彼らが何を伝えたかったのかその意図を読み取り、それを自分達の言葉（演奏）で表現します。中でも弦楽四重奏は4声体からなる一番シンプルな形態で、多くの作曲家にとって、一番自分の内なるものを表現できる形態であったと言われていています。実際、弦楽四重奏曲に本当に素晴らしい作品が多く残されていることから、それは証明されていると思います。

大学時代は、それぞれソロを専攻とし弦楽四重奏は選択授業だったわけですが、よき師に恵まれ、弦楽四重奏の魅力を知り、もっと弦楽四重奏の世界を突き詰めたく、大学院に弦楽四重奏専攻のグループとして初めて進学しました。その3年間は本当に弦楽四重奏の勉強だけに専念し、弦楽四重奏というものが、決して片手間ではできないものであるということを実感しました。大学院時代は、国内外の講習会や音楽祭にも多く参加し、たくさんの先生方のレッスンを受けました。いろいろな方向性、考え方、それぞれ素晴らしいレッスンでしたが、その中から、私たちの目指したい方向というものが、だんだん見えてくるようになりました。

日本では、弦楽四重奏を真剣に取り組む若い団体、というのはあまりいませんでしたが、ヨーロッパにはそういう団体がたくさんあることを知り、同じ年代の若いクアルテットのレッスンを聞いたり、演奏を聴いたりすることによって多くの刺激を受けました。

国際コンクールを受け始めたのもこの頃です。古典から現代までの幅広いレパートリー数曲を同時に仕上げていく、という経験も初めてでしたし、外国の知らない人々に、自分達の演奏を聴かれ、拍手を頂き、演奏直後に次々と話しかけられる、という経験も初めてでした。

コンクールというものは、極度に緊張して実力が発揮できなかったり、いろいろなことが起こりやすいものですが、私たちの場合は仲の良い4人組でしたので、いつも楽しく和気あいあいとでき、平常心でのぞめたように思います。

2000年の冬に、オーストリアのグラーツで行われたシューベルト国際コンクールで優勝、その2ヶ月後の4月にロンドン国際弦楽四重奏コンクールで第2位に入賞した際には、日本で勉強している弦楽四重奏団、ということで大変驚かれました。日本にこれだけのことを教えられる先生がいるのか、とも驚かれました。

ちょうど2000年3月に大学院を修了した時のことで、大学院で3年間弦楽四重奏の勉強に打ちこんだその内容が、ヨーロッパで認められ、大変嬉しかったのを覚えています。

その2つの国際コンクールで上位入賞した時には、その半年後から、ウィーンでの留学を始めることがすでに決まっていた。コンクールで入賞したことによって演奏会の機会も増えて幸せでしたが、それがゴールにならず、スタートにできた、という意味で本当に運が良かったと思います。コンクールで優勝すると、演奏活動が急に忙しくなり、演奏会の予定に追われ、じっくりと勉強できなくなる、というパターンが多いと聞いていました。私たちの場合は、

ウィーン国立音楽大学大学院に、やはり弦楽四重奏専攻として在籍できることがすでに決まっており、コンクール入賞をひとつの経過として、さらに勉強に専念できる環境が整っていたのでした。

ウィーンを留学先に決めたのは、素晴らしい先生との出会いがあったからです。

98年冬に、芸大とウィーン音大の姉妹校提携の共同研究のために、ウィーンを訪れた際、今の私たちの師、ヨハネス・マイスル先生との出会いがありました。それまでに、たくさんのレッスンを受けてきましたが、その時に受けたマイスル先生のレッスンでは、楽譜から音楽をひきだすその的確な解釈と先生の溢れる音楽性に目からうろこが落ちる思いでした。留学するのならば、ぜひこの先生のもとでじっくりと腰を据えて勉強したい、と4人が一致した瞬間でした。

ウィーンに来たのは、マイスル先生がウィーン音大で教えているから、という理由でしたが、実際に留学を始めてみて、ウィーンが音楽の都と言われるわけがよくわかりました。毎日オペラが上演され、それが立ち見などは、300円くらいで聴くことができ、またコンサートも毎晩行われ、いつもどこも、満員です。

日本でクラシック音楽を勉強していた私たちにとって、オペラを「生で聴く」ということは、経済的にまず不可能であり、せいぜいレーザーディスクで「見る」ものでした。それがウィーンにいる今では、気軽に日常的に、しかも最上級の演奏でオペラを聴くことができ、その私たちへの影響は計り知れません。

留学して1年半経った頃、モーツァルトの弦楽四重奏を勉強していた時に、その音楽に、次々にオペラの一場面が自然に浮かんだ時には、私たちの体の中にオペラが自然にはいりこんできていることを感じ嬉しく思いました。

クラシック音楽に携わる者にとって、“憧れ”の土地であるウィーンは、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトが活躍した地であり、そしてその後、マーラー、シェーンベルク、ウェーベルン、アルバン・ベルクが活発に音楽活動を繰り広げた由緒ある土地です。今でも街中に、作曲家たちの足跡が残され、普段歩いている中で、突然ベートーヴェンの住んでいた家が目の前に現れたりします。

街中にも静けさがあり、日曜の朝などは、教会の鐘の音しか聞こえません。少し足を延ばせば、ベートーヴェンの散歩道があり、風の音、鳥の鳴き声、小川のせせらぎ、耳をすまさなくとも、静かな空間の中でそれが自然に耳に入ってきて、作曲家たちの楽想が浮かび上がってくる時というのは、こういう情景の中でだったのだろうなあ、と思いを馳せています。

こちらの冬は、空が厚い雲に覆われ、太陽が顔を出すことはほとんどありません。夕方4時にはどっぷりと真っ暗になり、重くどんよりとした長い冬が続くわけですが、それを経て、春がやってきた時の喜びはひとしおです。初めてウィーンでの長い冬を経験して、ようやく春が到来し太陽が出た時、身も心も踊る感じがする、というのはこういうことか、と思い、作曲家たちが感じたで

あろう春の喜びを体中で感じた気がしました。

また音楽と宗教の密接な結び付きも、こちらに来て強く感じます。こちらの祝日は、すべて神様の誕生や復活、キリスト教のものと関連づいているのですが、普段買い物の途中で教会などに立ち寄ってみても、祈っている人がいたり、ミサがラジオで中継されていたりします。

ハイドンの弦楽四重奏曲は曲の冒頭に「我が神に栄光有れ」と書かれていたりもしますが、ハイドンの緩徐楽章の美しさは、祈り以外のなにものでもないように思われます。美術館で絵画を多く見た時にも感じたことですが、やはり芸術作品は、信仰心から生まれてきているように思えます。

音楽と語学（言語）の関係も、やはり密接であるように思います。ウィーンのドイツ語は、ウィーン訛りなのですが、これがいわゆるウィーンの音楽ととても深い結びつきがあるように思われるのです。昔、チェコの作曲家ドヴォルザークの弦楽四重奏曲を、チェコを代表するパノハ弦楽四重奏団にレッスンを受けた時に、チェコの音楽は、チェコ語と同じように、いつも頭にアクセント（強調）が来るのだ、と言われたことがありました。その時に、その国の音楽とその国の言葉は、同じなのだ、ということに漠然と知ったわけですが、留学を始めて1年経った頃、ブラームスのクラリネット五重奏曲を勉強していた時に、その第3楽章の冒頭部分について、私たちの先生がこうおっしゃいました。「ブラームスがウィーンの秋の暖かな柔らかい日差しのさす午後、公園をゆっくりと散歩してるんだ。」その瞬間、頭の中にウィーンの秋の情景が一気に広がり、その光景を思い浮かべながら弾いた時、私たちの音色、響きが、一気に変わりました。これは、ウィーンにいて、ウィーンの秋を経験していたからこそ広がった情景であり、また、このことを先生から（ウィーン訛りの）ドイツ語で言われドイツ語で理解した、ということも関係があるように思えます。そういう意味でも、ウィーンという街に、腰を据えて住み、空気から何からすべてを感じられる、というこの環境はなんとも言えず幸せだと思います。

日本を離れて異国の地で腰を据えて勉強する、ということは、音楽の面だけでなく、いろいろなことを考えるいい機会にもなりました。旅行だけでは感じられない、住んでみて初めてわかることがたくさんありました。まず、自分達が「日本人」であるということ、日本にいた頃は当たり前過ぎてわざわざ感じなかったことですが、オーストリアという国で、外国人という立場になり、「本の中」だけの問題であった「人種差別」を自分で実際に受けてみて考えさせられることもありました。

初めて人種差別を受けた時には、大変ショックでしたが、受け慣れてくると、自分が「日本人」であるという理由よりも、「外国人（オーストリア人ではない）」であるから、ということがわかり始めました。オーストリアに起きた歴史を知り始めると、未だにナチスの問題は根強く残っており、ただ単に意地悪で人種差別をしているわけではなく、歴史がそうさせるのかもしれない、とも思うようになりました。日本と韓国に起きた歴史は、若い世代に詳しく語り継が

れることなく（韓国では語り継がれているようですが）、まさに「歴史」という括られた1つの「本」の中の出来事になりかけているように思われます。オーストリアとドイツは、今でもそのナチスの問題で熱く議論が交わされ、戦後に生まれた若い世代にまでしっかりと語り継がれており、戦争自体は終わっているかもしれないけれど、人々の中ではまだまだ終わっていないのだ、とこちらの学生から聞きました。そのような話をしてみても、「島国日本」から「陸続きのヨーロッパ」に来てみて、自分達がいかに平和ぼけしていたか、ということもよくわかりました。こちらでは人々が（学生も）政治に問題意識を持って参加しています。陸続きのヨーロッパの人達は、やはり昔から、こちらの街があちらの国のものになったり、戻ったり、ということが繰り返されていた歴史上、自分の身を守るために、アンテナを張っているのだと思いました。どちらがいいとか悪いとかいう問題ではなく、日本を離れてみて、自分の国、日本が客観的に見えるようになったように思います。

日本にいた頃は、リハーサルに出かけるためにも、満員電車で往復3時間かけ、人ごみの中を慌しくかきわけ、日々が忙しく時間の流れが速かったのですが、ウィーンは街の大きさも小さいので、どこへ行くのにも30分あれば十分で、ゆったりと流れる時間の中で生活しています。時間的余裕が精神的余裕に密接につながっていることを実感し、また音楽というものは、心が解放され、豊かでないといけないものだ、と思うようになりました。

今、私たちは結成して8年が経ったところです。この8年間本当にいろいろなことがありました。音楽を通して、素晴らしい出会いも多くあり、この年齢でこれだけの素晴らしい経験ができていることを本当に幸せだと思っています。今私たちが、これだけ自分達のやりたいことに専念できる環境に感謝し、これを社会に恩返ししたいと思っています。

4人という人間が1つのものを一緒に創りあげていく、ということは、4人の音楽性、価値観、そういったものがすべていい具合に溶け合えるといいのですが、やはり相性（人間性、音楽性共に）というのも本当に大事な問題だと思います。4人というこのメンバーがめぐりあえたのも、何かの導きだったように思います。4人の弦楽四重奏に対する想いは一緒ですので、これからも、4人が4人とも成長し、年を重ねるごとに魅力を増していけるような弦楽四重奏団として、息長く演奏活動ができ、その弦楽四重奏の世界の素晴らしさを多くの人々とわかちあっていけたら、と思っています。